

SHANNON HOO interview

バンドの絆と家族の絆ほど力強いものはないんだよ

ケロウスをしのぐド田舎から出現したパワーナチュラリスト草団

撮影 WILLIAM HAMES

身内で楽しむ程度だつた四曲入りのデモ・テー
ブがキャヒタル・レコードの目に止まり、ライヴ

● L.A.に出てきた理由と引き上げた理由は?

いうかな、俺も音楽やつてメシを食つてるわけだから、どつかで誰かの影響は受けるさ。自分で

じゃないかな。俺たちは、いわゆる最新のスタジオ技術を駆使しすぎてナマの感覚をなくしたくな

を一回もやつていないというのに即契約にこぎつけた超ラッキーで超木知数の新人バンド——それがブラインド・メロンである。イギリス・インディーならともかく、ライヴ実力主義の國アメリカでは、固定客も何もつかんでいないうちからデビュLが決まってしまったというのは何だらうか。それはこのバンドの音樂性が今のアメリカの流れにズツハマリの魅力を放っていたからだ。

なんなのは、当時は自分でもわからなかつたけど、とにかくあそこにはない、と気づいてた。それに警察の世話をになつたこともあるしさ(笑)。だから、俺になにかを与えてくれる街に移ろう、田舎じや5年住んでてもできない経験を、1年で経験してやろう、と思いつたわけ。で、LAに出きて、最初は、ありとあらゆるタイプの人間とつき合える土壤みたいなのがすごく気についてたんだ。LAって、まさしくあらゆる人間のるっぽだからなあ、なんて。でも、2年もいると、LAの悪い部分つていうかさ、腐った部分みたいなのがだんだん見えてきて、もう十分つて感じになつてさ、それでメンバー全員でノースキヤロライナに引っ越したというわけさ。田舎の人間にはここへのベースにはついて行けないんだな。気が休まる間もないんだ。ここには。でもしLAでいろんな経験をして人間に成長したとは思う

●バール・ジャムやブランック・クロウズといったバンドが今非常に支持されていますが、その一方で「おまえら單なるリヴィア・アル・バンドで、

「確かに俺たち全員、60年代とか70年代の音楽に影響を受けてるし、曲を書く時もべつにそうした影響を排除したりしない。だって、その、なんてたもこれから絶対そういう目に遭うと思うんですが。

づいてるかどうかはべつとしても。でもいるんだよな、「このバンドは誰に似ているか」みたいなことを分析したがる連中がさ。でも俺はそんなことはしない。そうだなあ、たとえば、俺は君の質問を聞いてほかのインタビューと比較したりはないぜ。比較するのは簡単なことだけどさ。前におんじで質問をされるかもしれないし。でも俺は相手をよく理解して、広い心で聞きたいたいと思う。たとえインタビューの内容がほかと似ていってもね。けど、たとえば、もし俺たちのサウンドを聴いてストーンズとかのほかのバンドを聴いてるような、デジャヴュを感じるって人がいるしたら、俺にはむしろお世辞に聞こえるけどなあ。なんたつてストーンズはグレートだもんな(笑)●でもいすれにしても80年代以降の影響というのがあなたがたの音楽にはほとんど感じられませんね。

「いやいや、そんなことはないよ。俺は80年代以降の音にもすごい影響を受けてるぜ。クリストファーーとグレン、それに、そう、ロジャースは古いうものが結構好きで、俺はちょっと風変わりな連中でに夢中なんだ。エルトン・ジョンとかジム・クロードとかさ。あとシド・バレットだろう、それからビンク・フロイドに……それから……うーん、そうだ、パンクだって大好きさ。とにかく全員がいろんな年代のいろんな音楽から影響を受けてるもんだから、うちに来ると、それぞれの部屋からまつたく違うジャンルの音楽が聞こえてくるんだ。そういう最近グレンが聴いてるので俺もすっげえ気に入ったのがあったな……なんだつけ……えーと、あ、そうそう、どつかの聖歌隊のアルバムでさ、13、14歳の子供がトゥーアーラートってグレゴリア聖歌がなんかを歌うんだ! 鳥肌もんのすごさだぜ! 俺達の音楽にノスタルジックなものを感じるとすれば、それはレコードイングの時に、あんまりエフェクト類を使わないから

「いんだよ。だから俺たちの音つてすごくドライだろ？　今じゃこういう音を出すバンドは少ないけど、60年代後半とか70年代はそういうのが大勢いた、っていうより、あの時代はもう全部そんな感じだったから、俺たちが60・70年代っぽいっていうのも、ミクシング方法とか、ヴァーカルのドライな部分を指して言ってるんだろう」

●最後に成功というものをどう捉えていますか？

「そうなんだ。成功ってことはの定義にもよるよね。俺にとっての成功とは、自分自身に満足するってことさ。いまの俺は、内面的にいろんな悩みを抱えてるんだけど、これから数年間にバンド内で経験するいろいろな出来事を通じて、そういう俺の中での問題も解決されていくと思うんだ。それが俺にとっての、金には換えられない成功なのさ。金っていうのは俺に言わせれば『多く持てば持つほど失う量も多い』ってやつさ。俺は今の状況に、俺を支えてくれる仲間に、すごく満足してる。俺の顔が雑誌の表紙になろうがなるまいがそんなこと気にもならない。ほかの4人だってそうさ。俺たち5人って、シーンの流れに乗り遅れないようによしかりきになるっていうより、むしろのんびりとその流れを傍観しているタイプの人空間なんだ。とにかく俺は俺自身の内面的な欲求が満たされればそれでいいんだ。インディアナにに戻ったのもそのためさ。おふくろと住んでるんだが、もう2度と出でていかないだろうな。出ていく気すらないよ。昔の俺は家族のありがたみなんて感じたこともなかつた。クリスマスに家族全員がそろつても、そんなの当たり前だと思ってたんだ。家族の絆ほど力強いものはないのにさ……。だから今までこうしてインディアナに戻つて、毎日お袋やオヤジと一緒に時間が過ぎるなんて——ま、実は2人は俺が19の時に離婚したんだが——今の俺にはこれ以上幸せなことはない。これこそ俺にとっての成功なのさ」

WATCH OUT! Blind Melon

